

領域 8 インフォーマルミーティング議事録

開催日時: 2019年3月16日 12:30-13:15

開催場所: 九州大学(S302 会場)

出席者

領域代表(任期:2018/4–2019/3)

吉村 一良 (京大理)

領域副代表(任期:2018/4–2019/3)

堀田 貴嗣(首都大理)

次期領域副代表(任期:2019/4–2020/3)

藤 秀樹(神戸大理)

次次期領域副代表(任期:2020/4–2021/3)

楠瀬 博明(明大理工)

領域運営委員 (任期: 2018/4–2019/3)

深澤 英人 (千葉大理)、中島 正道 (阪大理)、矢島 健 (東大物性研)、

山川 洋一 (名大理)、川崎 郁斗 (日本原子力研究開発機構)

領域運営委員 (任期: 2018/10–2019/9)

大川 万里生 (東理大理)、辻 直人 (理研)、越智 正之 (阪大理)、

志村 恭通 (広島大先端物質科学)

次期領域運営委員 (任期: 2019/4–2020/3)

谷口 晴香(岩手大理工)、長谷川 巧(広大院総合)、出村 郷志(日大理工)、

三本 啓輔(富山県立大)、横山 淳(茨城大)

13:15 頃の出席者数: 30 名程度 (上記を含む)

議題

1. 第 74 回年次大会の総括

1.1 講演数

発表件数は前年並み。

表 1: 第 74 回年次大会における領域 8 の講演数(招待講演、企画講演含む)。

	口頭	ポスター	合計
低温	171	97	268
磁性	80	82	162
全体	251	179	430

cf) 第 71 回 (東北学院) 476 件、2016 秋 (金沢) 612 件

第 72 回 (大阪) 513 件、2017 秋 (岩手) 512 件

第 73 回 (東京理科) 442 件、2018 秋 (同志社) 556 件

- ・ シンポジウムは領域 8 主催が 3 件、副となる合同シンポが 5 件。

1.2 プログラム編成

➤ シンポジウム

- ・ 領域 8 主催シンポジウム 3 件(単独 2 件、共催 1 件)。
- ・ 領域 8 が副の合同シンポジウム 5 件。
- ・ 運営委員による順位づけ(利益相反を考慮)に基づき、高得点の件から優先的に開催日時を希望通り決定した(合同シンポジウムとの内容重複に関しても他領域と調整)。

➤ 口頭発表

- ・ 低温はパラレルセッションを避けられなかった。
- ・ 磁性はパラレルセッションが 3 つの時間帯で。
- ・ 磁性シンポジウムの時間帯に磁性のセッションを行わなかった。
- ・ 理論セッションをまず分類し、その後件数の多いセッションをまとめて組んだ。
- ・ マルチフェロ、トポロジカル、キタエフ液体の件数がすべて 3~4 件で、これらの単独セッションを組むのが難しかったため、キタエフ液体のみを Ir セッションの後半に配置し、遷移金属化合物 1・2 のセッションを設けた。
- ・ 講演内容ごとのまとまりを優先しつつ、セッション間での休憩時間をなるべく統一。
- ・ 学生優秀発表賞が始まったため、最終日には審査対象者のいないセッションを配置した。

➤ ポスター発表

- ・ 初日 49 件、2 日目午前 96 件、午後 34 件という指定があったため、低温を 2 日目午前にした(申し込み重複のため、97→96 件が見込まれたため)。
- ・ 口頭発表とポスター発表となるべく内容のオーバーラップがないように配置した。

➤ シンポジウム

- ・ シンポジウムは、今回主催で 3 件認められた。
- ・ シンポジウム用に 250 人規模の部屋を申請していたが、そちらはかなわなかった。その代わり、ポスター会場を含む S 会場の部屋がすべてあてがわれた。
- ・ シンポジウム用には大部屋(定員 216 人)を割り当てた。
- ・ 過去のセッション実績に基づき、大部屋(定員 216 人)×2、中部屋 1(定員 143 人)×2、中部屋 2(定員 132 人)を割り当てた。

➤ 他領域との合同セッション(主に低温)

- ・ 調整は円滑に行われ、特に問題なし。
- ・ 基本は、「～番目は領域～と合同」とプログラムに記載。
マルチフェロ: 春学会では領域 3、秋学会では領域 8 が編成を担当。領域 8 で申し込んだ 2 件のうち、1 件は領域 3 に移動、もう 1 件は学生優秀発表賞にエントリーしていたため、例外的に領域 8 で発表。
- ・ トポロジカル: 領域 4、8 それぞれで開催。領域 8 では、遷移金属化合物等に分類。

- プログラム編成会議
- ・ 現代表、現副代表、次期代表、次期副代表の4名参加。
軽微な修正のみ。

2. 領域委員会 (2018年11月)の報告

- ・ 領域8のすべての招待講演、シンポジウムは承認された。
- ・ 領域8も今回から学生賞を開始するという報告をした。
- ・ 学生優秀発表賞の賞状とカバーのサンプルが回覧された。
- ・ 大会スケジュールに関する改善について、講演申込～プログラム公開までの時期を現在よりも遅くしたいというビジョン、参加登録と概要集の提出を同時にする仕様にして参加登録の時期を遅くするなど。

3. 次期領域運営委員の紹介 (2019年4月–2020年3月)

- <低温> 谷口 晴香 氏(岩手大学理工学部、実験)、長谷川 巧 氏(広大院総合、実験)、
出村 郷志 氏(日大理工、実験)
- <磁性> 三本 啓輔 氏(富山県立大学、理論)、横山 淳 氏(茨城大学、実験)

4. 次次期領域運営委員の推薦および承認

- <低温> 竹森 那由多 氏(岡山大基礎研)、大槻 太毅 氏(京大人環)
 - <磁性> 榊原 寛史氏(鳥取大工)、松本 裕司 氏(富山大理)
- 拍手をもって全員承認された。

5. 学生優秀発表賞について

5-1. 応募状況

- ・ 応募総数 35件 (実験28件、理論7件)
 - ・ 所属別
- | | |
|-----|---------------------|
| 13件 | 東京大 |
| 5件 | 名古屋大 |
| 4件 | 京都大 |
| 2件 | 北海道大、東京理科大、筑波大、広島大 |
| 1件 | 東北大、東工大、大阪大、神戸大、九州大 |

5-2. 事前審査(書類審査)

- ・ 審査員は、主に、応募者の指導教員と同じ研究室の教員に依頼。指導教員には、本審査の審査員をお願いすることとした。
- ・ 1件につき3名の審査員。
- ・ 評点の高い15名を合格とした。

5-3. 本審査(学会発表の審査)

- ・ 審査員は、主に本審査に進んだ応募者の指導教員。一部、同じ研究室の教員にも依頼(割り当ての関係で、領域副代表も審査員として参加)。
- ・ 発表1件につき4名の審査員。
- ・ 審査員一人につき3件あるいは4件を見た。
- ・ 選考委員会 日時:3月17日13時30分 場所:S301
領域代表(吉村)、領域副代表(堀田)、次期領域副代表(藤)
運営委員代表(深澤)、運営委員副代表(山川)
学生賞担当(川崎)、学生賞副担当(中島)

5-4. 今後に向けて

全体

- ・ 学生優秀発表賞の趣旨はよい。しかし賞の運営には、運営委員の多大なボランティアが必要であり、若手の研究奨励のために、同じ若手研究者の貴重な時間が犠牲になる。
- ・ 領域8としては、可能な限り賞の運営の簡素化、省力化を図ることで、少しでも運営委員の負担を軽くすることを考えるべき。それが、今後の安定した賞の運営につながる。
- ・ 発表を見ることは必須で書類審査のみとすることはできない。
- ・ 情報開示申請が仮にあった場合に耐えうる審査内容になるようにすべきであるが、一方で負担軽減を考えることが重要。

応募段階

- ・ 学会発表申込み web サイトで、「学生発表賞に応募する」にチェックを入れるようになっていたが、それだけで応募したことにならないことは、注意文を入れ、領域 HP や ML で周知を徹底することが必要。
- ・ web サイトの注意文については、学会事務局に確認をし、必要があれば修正を申し入れる(領域代表あるいは副代表から)。
- ・ 今回は申込み時におけるこちらの不手際で、やむなく個別に学会発表申込み時のチェックの確認をしたが、今後は、運営委員がいちいち確認しないことも周知する。
- ・ 応募書類の様式の見直しを検討(もう少し分量を増やすなど)。
- ・ 応募受付用メールアドレスを作成し、Staff-ML に登録。ただし、ML に送信はできるが、配信はされない非対称な登録にする。可能であれば、クラウドの利用も検討。
- ・ 応募総数が今後増えていくと捌ききれない、負担が大きすぎるなど、懸念がある。
- ・ 指導教員は、レベルの高い学生に応募させるようお願いする。相当に自信のある学生が応募するもの、という位置づけの定着を図り賞のレベルを上げる。
- ・ 今後、一人の指導教員から複数の学生の応募は遠慮してもらう可能性も検討(ただし受賞者を4名程度としているので、同一研究室から複数名の応募を断るのは抵抗がある)。

事前審査

- ・ 事前審査の審査員の割り当ては、今回はそこまで大変ではなかったが、応募数が多いと、かなり面倒になることが予想される。

- ・ 事前審査では、審査員の割り当て、書類の送付、結果の回収・集計などの負担が学生賞担当に集中。応募数が増えると、今回のやり方では、学生賞担当者の負担があまりにも大きく、システムとしてもたない。運営委員(プラス領域代表、副代表も?)で事前審査を行う可能性を検討する。

本審査

- ・ 本審査の審査員割り当てが想像以上に難しく、また大変。
- ・ 事前審査で 15 名を残すとしたが多すぎる。受賞者は 4 名程度なので 8 名程度か。
- ・ 今回は、発表 1 件につき審査員 4 名としていたが、多すぎて審査員の確保および割り当てが大変だった。1 件につき 3 名ないし 2 名にすることを検討。

以上の簡素化・省力化について、その流れに沿って今後運営方法を修正する旨、運営委員代表・深澤より確認が行われ、了承された。

以上
(文責: 矢島 健)